2020年（平成32年）10月23日　金曜日　1892年3月11日第3種郵便物認可

「ぬ」の心をとらえよ

地球外生命との芸術交流始まる

政府は22日、箱根山中に飛来し10年になる地球外由来物体との芸術交流事業を開始すると発表した。

2010年12月に飛来した物体は、国際調査チームによる非接触的内部探索により、地球外由来の知的生命であること、また高度に記号的な交信がすでに成立していることが証明されている。しかし物体外部にひらがなの「ぬ」に似たパターンが浮き出すなどわずかな入出力の形跡を除いて、宇宙人とのコンタクトを実感する大きな変化のないまま10年が過ぎようとしている。

政府の諮問機関である「通称ぬとの接触に関する特別委員会」が一昨年まとめた意見書は、いかなる異文化も最初のコンタクトは芸術であるのが望ましいとの判断を示した。政府対策本部はこの答申を受け、今年中に芸術交流事業を開始することを決めた。

それに先だち、全国の大学などにプランニングルームを開設し、「ぬ」に関するさまざまな仮説を前提にした作品プランを抽出する。たとえば、人間とは異なる記憶の仕組みや、感情の有無、個体・集団構造の違いなどを考慮したうえで、「ぬ」に伝わる絵画や音楽を作る。

「ぬ」研究家でシステムアーティストの安斎利洋氏は「身体や意識の構造を共有しない生命体との間に、はたして芸術が可能か。この問いは、人間と表現の本質を逆照射するだろう」と語っている。

1/27 《ぬ》アート
制作してくる
↓
芸術とは何か？
考える
コンピュータ.

色彩
紙粘土

造形的
空間

－構想－

美とは？ ← 自分がでてくると嬉しいはず
↑
自画像

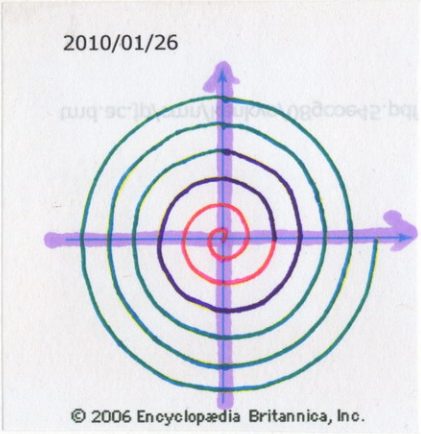
＊地球外＊
生命
ぬ

テキスト中にあらわれる否定あるいは「死ぬ」

思想
↑

形をもたない
物質的身体がない
↓
ひらがなに似ている
パターン
↓
非定形 → 螺旋構造 → DNA
形を変化させることができる
↓
エネルギー
電磁波 → 物理 数式 サインカーブ 幾何

高度に発達
知的生命
↓
knowledge 知識
↓
ヘビ



Archimedes' spiral
アルキメデスの蝸牛
Slug

動的平衡

たえず生成・消滅をくりかえす

目に見えるもの
↕
目には見えないもの

- 暗黒物質 Dark matter
  と
- 暗黒エネルギー Dark energy

‖

真空のエネルギー

不可視なものの芸術は可能？

↓

特定の位相・周波数は判別できる。

ゲーテ，ウィトゲンシュタインたちの"色彩論"を適用できる

十字架

↑

特別な要素から成り立つ

陰陽五行 ← 特別な要素から成り立つ

木火土金水

↙

四大元素説

↘

オリュンポス12神

↓

アスクレピウスのヘビ1対

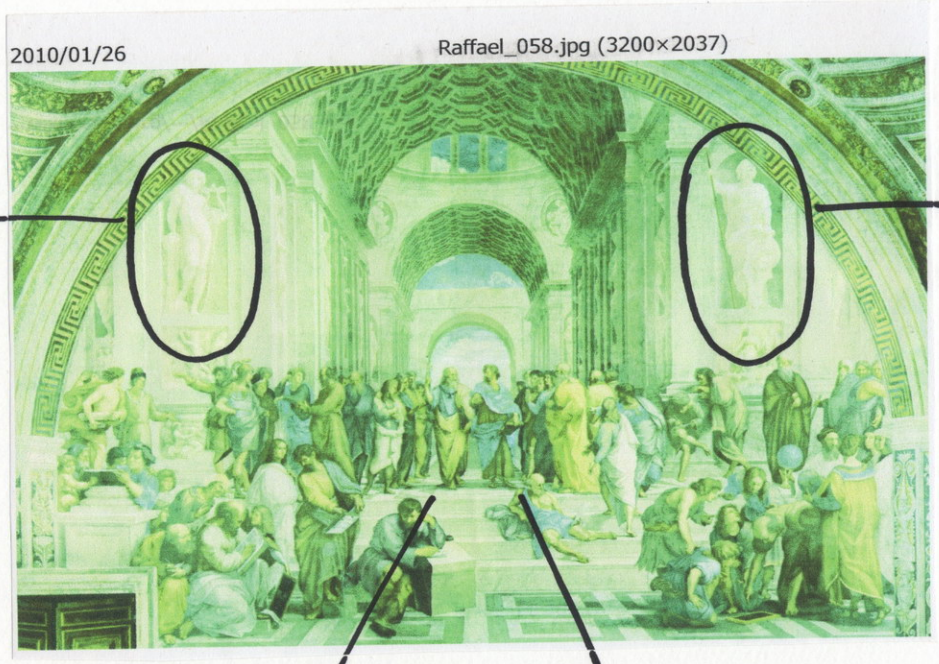
イデア IDEA

（プラトン）

図像学
iconography

ラファエロ・サンティ
『アテナイの学堂』

Scuola di Atene
1509-1510



アポローン
Salvation
Grace

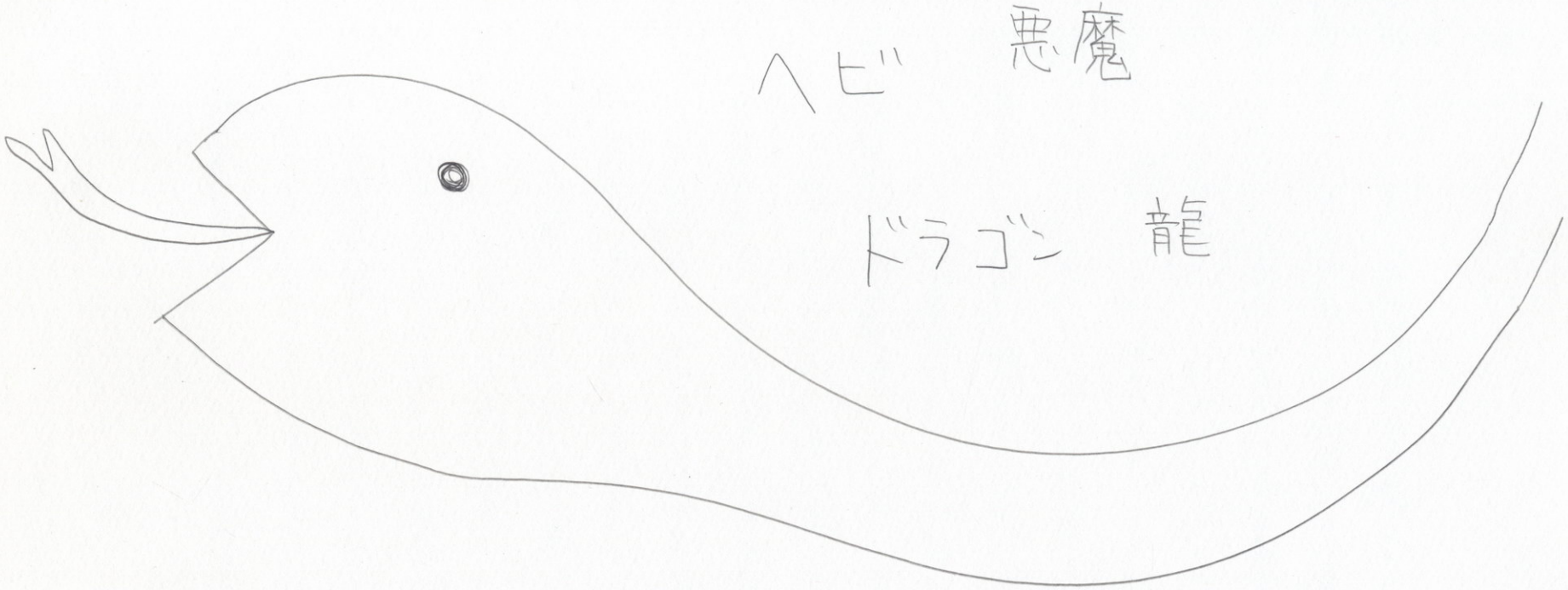
恩寵
上昇

アテーナー

重力
下降 Fall
Gravity

プラトン
観念
イデア論

アリストテレス
現実


ヘビ　悪魔
ドラゴン　龍

十二支考　蛇に関する民俗と伝説

南方熊楠

『古今要覧稿』巻五三一に「およそ十二辰に生物を配当せしは王充の『論衡』に初めて見たれども、『淮南子《えなんじ》』に山中一未《ひつじ》の日主人と称うるは羊なり、『荘子』に〈いまだかつて牧を為さず、而して※［＃「丬＋羊」、第4水準2-80-15］《しょう》奥に生ず〉といえるを『釈文』に西南隅の未地《ひつじのち》といいしは羊を以て未《ひつじ》に配当せしもその由来古し」と論じた。果してその通りなら十二支に十二の動物を配る事戦国時既に支那に存したらしく、『淮南子』に〈巳の日山中に寡人と称せるは、社中の蛇なり〉とある、蛇を以て巳に当てたのも前漢以前から行われた事だろうか。すべて蛇類は好んで水に近づきまたこれに入る。沙漠無水の地に長じた蛇すら能く水を泳ぎ、インドで崇拝さるる帽蛇《コブラ》は井にも入れば遠く船を追うて海に出る事もあり。されば諸国でいわゆる水怪の多くは水中また水辺に棲《す》む蛇である（バルフォール『印度事彙』蛇の条、テンネント『錫蘭博物志《ナチュラル・ヒストリ・オヴ・セイロン》』九章、グベルナチス『動物譚原《ゾーロジカル・ミソロジー》』二）。わが邦でも水辺に住んで人に怖れらるる諸蛇を水の主というほどの意《こころ》でミヅチと呼んだらしくそれに蛟※［＃「虫＋罔」、蝈、222-12］※［＃「虫＋礼のつくり」、虬、第3水準1-91-50］等の漢字を充《あ》てたはこれらも各支那の水怪の号《な》故だ。現今ミヅシ（加《かが》能《のと》）、メドチ（南部）、ミンツチ（蝦夷）など呼ぶは河童なれど、最上川と佐渡の水蛇一能《よ》く人を殺すといえば（『善庵随筆』）、支那

の蛟同様水の主たる蛇が人に化けて兇行するものをもとミヅチと呼びしが、後世その変形たる河童が専らミヅシの名を擅《ほしいまま》にし、御本体の蛇は池の主淵の主で通れどミヅチの称を失うたらしい。かく蛇を霊怪《ふしぎ》視した号《な》なるミヅチを、十二支の巳《し》に当て略してミと呼んだは同じく十二支の子《し》をネズミの略ネ、卯《ぼう》を兎の略ウで呼ぶに等し。また『和名抄』に蛇《じゃ》和名《わみょう》倍美《へみ》、蝮《ふく》和名《わみょう》波美《はみ》とあれば蛇類の最も古い総称がミで、宣長の説にツチは尊称だそうだから、ミヅチは蛇の主の義ちょうど支那で蟒《うわばみ》を王蛇と呼ぶ（『爾雅』）と同例だろう。さてグベルナチスが動物伝説のもっとも広く行き渡ったは蛇話だといったごとく、現存の蛇が千六百余種あり。寒帯地とニューゼーランドハワイ等少数の島を除き諸方の原野山林沼沢湖海雑多の場所に棲み大小形色動作習性各同じからず、中には劇毒無類で人畜に大難を蒙《こうむ》らするもあれば無毒ながら丸呑みと来る奴も多く古来人類の歴史に関係甚だ深い。故にこれに関する民族と伝説は無尽蔵でこれを概要して規律正しく叙《の》ぶるはとても拙筆では出来ぬ。だが昨年三月号竜の話の末文に大分メートル高く約束をしたから、今更黙ってもおれず、ざっと次のごとく事項を分け列ねた各題目の下に蛇についての諸国の民俗と伝説の一斑《いっぱん》を書き集めよう、竜の話に出た事なるべくまた言わぬ故一双《ふたつ》参《あわ》せて欲しい。

名義

本居宣長いわく、「『古事記』の遠呂智《おろち》は『書紀』に大蛇とあり、『和名抄』に蛇和名一倍美《へみ》一名一久知奈波《くちなわ》、『日本紀私記』にいふ乎呂知《おろち》とあり、今俗には小さく尋常なるを久知奈波といひ、やや大なるを幣毘《へび》といふ、なほ大なるを宇波婆美《うわばみ》といひ、極めて大なるを蛇《じゃ》といふなり、遠呂智とは俗に蛇といふばかりなるをぞいひけむ云々」。またいわく、「『和名抄』に蛇和名倍美一※［＃「虫＋元」、224-5］蛇《げんじゃ》加良須倍美《からすへみ》※［＃「虫＋冉」、224-6］蛇《ぜんじゃ》仁之木倍美《にしきへみ》とありて幣美《へみ》てふ［＃「てふ」に「〔という〕」の注記］名ぞ主《むね》と聞ゆる、同じ『和名抄』蝮の条に、〈俗あるいは蛇を呼ぶに反鼻と為す、その音一片尾《へんび》〉といへるは和名倍美とは似たれども別なりと聞ゆ、反鼻は本より正名にあらず一名なるを、その音を取りて和名とすべきにあらず、それも上代この御国になかりし物は漢の一名などをも取りて名づくる例かれこれあれども、蛇などは神代よりある物なれば名もなかるべきにあらず云々、その上幣美といふ名は広くいひ習はしたるやうに聞ゆるをや、しかればこは反鼻の音と自然似たるのみなりけり」。また『和名抄』に蟒蛇《ぼうじゃ》、和名一夜万加々知《やまかがち》、『古事記』に赤加賀智《あかかがち》とは酸漿《ほおずき》なりとあれば、山に棲んで眼光強い蛇を山酸漿《やまかがち》といったのであろう。今もヤマカガシちゅう

蛇赤くて斑紋あり山野に住み長《たけ》六、七尺に及び、剛強にして人に敵抗す。三河の俗説に愛宕または山神の使といい、雷鳴の際天上すともいう（早川孝太郎《はやかわこうたろう》氏説）。ありふれた本邦の蛇の中で一番大きいからこれを支那の巨蟒《きょぼう》に充《あ》てたものか。普通に蟒に充てるウワバミは小野蘭山これを『和名抄』の夜万加々智とす。深山に棲み眼大にして光り深紅の舌と二寸ばかりの小さき耳あり、物を食えば高鼾《たかいびき》して睡《ねむ》る由（『和漢三才図会』）、何かの間違いと見え近頃一向かかる蛇あるを聞かず。ただし昔到る処林野多くも深くもあった世には、尋常のヤマカガシなども今より迥《ずっ》と老大のもありたるべく、それらを恐怖もて誤察し種々誇大のウワバミ譚をも生じたなるべし、『本草綱目』には巨蟒《きょぼう》一名一鱗蛇《りんじゃ》と見えて、さきに書いたごとく大蛇様で四足ある大蜥蜴だが、〈蟒は蛇の最も大なるもの、故に王蛇という〉といい（『爾雅』註）、諸書特にその大きさを記して四足ありと言わぬを見れば、アジアの暖地に数種あるピゾン属の諸大蛇、また時にはその他諸蛇の甚だしく成長したのを総括した名らしい。ここに一例としてインド産のピゾン一種人に馴《な》るる状《さま》を示す（図略す）。これは身長二丈余に達する事あり。英人のいわゆる岩蛇《ロック・スネーク》だ。

『和名抄』に仁之木倍美《にしきへみ》と訓《よ》んだ※［#「虫＋冉」、225-11］蛇は日本にない。予漢洋諸典を調べるに後インドとマレー諸島産なる大蛇ピゾ

ン・レチクラツスに相違ない。この学名はその脊紋が網眼に似居るに基づき、すこぶる美麗でかの辺の三絃様な楽器の胴に張りおり、『本草』に〈※［＃「虫＋冉」、225-13］蛇嶺南に生ず、大なるは五、六丈、囲り四、五尺、小なるも三、四丈を下らず〉とあるが、『エンサイクロペジア・ブリタンニカ』十一版に南米熱地産なるアナコンダに次いで諸蛇の最大なるものとあり。アはベーツ説に四十フィートに達するそうだが、ピゾン・レチクラツスは三十フィートまで長ずというから『本草』の懸値《かけね》は恕《ゆる》すべしで、実に東半球最大の蛇だ。さて『本草』に〈身斑紋あり、故に錦纈《きんけつ》のごとし春夏山林中にて鹿を伺いてこれを呑む云々〉とあるは事実で、その肉や胆《い》の薬効を『本草』に記せると実際旅行中実験した欧人一輩《ら》の話とが十分二者を同物とする拙見を扶《たす》け立たしむ。マルコ・ポロ南詔国《なんしょうこく》の極めて大きな蛇を記して「その長《たけ》三丈ほど、太さ大樽のごとく、大きな奴は周り三尺ばかり、頭に近く二前脚あり、後足は鷹また獅子の爪ごとき爪でこれを表わすのみ、頭すこぶる大きく眼は巨なる麪麭《パン》より大きく、口広くして人を丸嚥《まるの》みにすべく歯大にして尖《とが》れり、これを見て人畜何ぞ戦慄せざらん、日中は暑ければ地下に躱《かく》れ夜出て食を覓《もと》め、また河や湖泉に行き水を飲む、その身重き故行くごとに尾のために地一凹《くぼ》む事大樽に酒を詰めて挽《ひ》きずりしごとし、この蛇往還必ず一途に由る故、猟師その跡に深く杭《くい》を打ち込み、その

頂に鋭き鋼《はがね》の刃一剃刀《かみそり》様なるを植え、沙《すな》もて覆うて見えざらしむ。かかる杭と刃物を蛇跡へ幾つも設け置いたと知らないかの蛇は、走る力が速ければ刃の当りも強くしてやにわに落命してしまう、烏これを見て鳴くと、猟師が聞き付け走り来ると果して蛇が死んでおり、その胆を取りて高価に售《う》る。狂犬に咬まれた者少しく服《の》まば即座に治る、また難産や疥癬に神効あり、その肉また甘《うま》ければ人好んで購《あがな》い食う」と言った。『淮南子《えなんじ》』に、越人※［#「虫＋冉」、226-14］蛇を得て上《よき》肴《さかな》となせど中国人は棄て用いるなし。『嶺表録異』に、晋安州で※［#「虫＋冉」、226-15］蛇を養い胆を取りて上貢としたと載せ、『五雑俎』に、〈※［#「虫＋冉」、226-16］蛇大にして能く鹿を呑む、その胆一粟を口に※［#「口＋禽」、226-16］《ふく》めば、拷掠《ごうりゃく》百数といえどもついに死せず、ただし性大寒にして能く陽道を萎せしめ人をして子なからしむ〉。ランドの『安南風俗迷信記』にこの蛇土名コン・トラン、その脂を塗れば鬚生ずとあれば漢医がこれを大寒性とせるは理あり、『※［#「土へん＋卑」、第3水準1-15-49］雅』には〈※［#「虫＋冉」、227-3］蛇の脂人骨に著《つ》くればすなわち軟らかなり〉。さてマルコの書をユールが注して、これは※［#「魚＋王の中の空白部に口が四つ」、第3水準1-94-55］《がく》の事だろう、イタリアのマッチオリは※［#「魚＋王の中の空白部に口が四つ」、第3水準1-94-55］の胆が小一瘡《かさ》や眼腫に無比の良薬だ

といったと言うたは甚だ物足らぬ。両《ふたつ》ながら胆が薬用さるるからマルコの大蛇と※[#「魚＋王の中の空白部に口が四つ」、第3水準1-94-55]と同物だとは、不埒《ふらち》な論法なる上何種の※[#「魚＋王の中の空白部に口が四つ」、第3水準1-94-55]にもマルコが記したごとき変な肢がない。予一謂《おも》うにマルコはこの事を人伝《ひとづて》に聞書《ききがき》した故多少の間違いは免れぬ。すなわち頭に近く二前脚ありとは全く誤聞だが、ここに件《くだん》の大蛇が※[#「虫＋冉」、227-8]蛇すなわちピゾン・レチクラツスたる最も有力な証拠はすべて蛇類は比較的新しき地質紀に蜥蜴類が漸次四脚を失うて化成した物で、精確にこれまでが蜥蜴類これからが蛇と別つ事はならぬ。されば過去世のピゾノモルファ（擬蟒蛇《うわばみもどき》）など体長きこと蟒蛇に逼《せま》りながら確かに肢を具えていた。さて※[#「虫＋冉」、227-11]蛇《ボイダエ》群の蛇はおよそ六十種あり、熱帯アメリカのボアやアナコンダ、それから眼前予の論題たる※[#「虫＋冉」、227-12]蛇《ピゾン》、いずれも横綱一著《つき》の大蛇がその内にある。知人英学士会員プーランゼーは、※[#「虫＋冉」、227-13]蛇《ボイダエ》群は蛇のもっとも原始な性質を保存すと言った。その訳はこの一群の諸蛇蜥蜴を離るる事極めて遠からず、腰骨と後足の痕《あと》をいささかながら留めおり、すなわち後足の代りに何の役にも立たぬ爪二つ相対して腹下にある。これ正しくマルコが鷹また獅の爪ごとき爪が後足を表わすといえるに合い、南詔国（現時雲

南省とシャン国の一部）辺に※［＃「虫＋冉」、228-1］蛇（ピゾン・レチクラツス）のほか大蛇体でかかる爪もて後足を表わすものなければ、マルコは多少の誤りはあるとも※［＃「虫＋冉」、228-2］蛇を記載した事疑いを容れず、予往年ロンドンに之《ゆ》きし時、この事をユールに報ぜんとダグラス男に頼むと、ユールは五年前に死んだと聞いて今まで黙りいたが、折角の聞を潰《つぶ》してしまうは惜しいから今となっては遼東の豕かも知れぬが筆し置く、この※［＃「虫＋冉」、228-5］蛇もまた竜に二足のみあるてふ説の一因であろう。

英語でサーペントもスネイクも、蛇とは誰も知り居るが、時にサーペント一および《エンド》スネイクと書いた文に遭《あ》う。その時は前者は人に害を加うる力ある蝮また蟒蛇等でその余平凡な蛇が後者だ。ヴァイパーとは上顎骨甚だ短く大毒牙を戴いたまま動かし得る蛇どもで、和漢の蝮もこれに属するからまず蝮と訳するほかなかろう。それからアスプといってエジプトの美女皇クレオパトラが敵に降らばその凱旋《がいせん》行列に引き歩かさるべきを恥じこの蛇に咬まれて自殺したとある。これはアフリカ諸方に多いハジ蛇なりという。これは既述竜の話中に図に出したインドのコブラ・デ・カペロ（帽蛇《ぼうじゃ》）に酷《よく》似るが喉後の眼鏡様の紋なし。インドで帽蛇を神視しまた蛇一遣《つか》いが種々戯弄して観《み》せるごとく古エジプトで神視され今も見世物に使わる物である。帽蛇は今も梵名ナーガで専ら通りおり、那伽

ウロボロスの蛇

《ナーガ》は漢訳仏典の竜なる由は既述竜の話で繰り返し述べた。また仏教に摩※［#「目＋侯」、第3水準1-88-88］羅伽《まほらか》てふ一部の下等神ありて天、竜、夜叉、乾闥婆《けんだつば》、阿修羅、金翅鳥《がるら》、緊那羅《きんなら》の最後に列《なら》んで八部を成す。いずれも働きは人より優《まし》だが人ほど前途成道の望みないだけが劣るという。この摩※［#「目＋侯」、第3水準1-88-88］羅伽は蟒神には大腹《たいふく》と訳し地竜にして腹行すと羅什《らじゅう》は言った。竜衆《ナーガ》すなわち帽蛇は毎度頭を高く立て歩くに蟒神衆は長く身を引いて行くのでこれは※［#「虫＋冉」、229-2］蛇《ピゾン》を神とするから出たのだ。

龍と詩人

宮澤賢治

龍のチャーナタは洞のなかへさして來る上げ潮からからだをうねり出した。

洞の隙間から朝日がきらきら射して來て水底の岩の凹凸をはっきり陰影で浮き出させ、またその岩につくたくさんの赤や白の動物を寫し出した。

チャーナタはうっとりその青くすこし朧ろな水を見た。それから洞のすきまを通して火のやうにきらきら光る海の水を淺黄いろの天末にかかる火球日天子の座を見た。

（おれはその幾千由旬の海を自由に漕ぎ、その清いそらを絶え絶え息して黒雲を卷きながら翔けれるのだ。それだのにおれはここを出て行けない。この洞の外の海に通ずる隙間は辛くも外をのぞくことができるに過ぎぬ。）

（聖龍王、聖龍王。わたしの罪を許しわたくしの呪をお解きください。）

チャーナタはかなしくまた洞のなかをふりかへり見た。そのとき日光の柱は水のなかの尾鰭に射して青くまた白くぎらぎら反射した。そのとき龍は洞の外で人の若々しい聲が呼ぶのを聽いた。

龍は外をのぞいた。

（敬ふべき老いた龍チャーナタよ。朝日の力をかりてわたしはおまへに許しを乞ひに來た。）

瓔珞をかざり黄金の太刀をはいた一人の立派な青年が外の疊石の青い苔にすわってゐた。

（何を許せといふのか。）

（龍よ。昨日の詩賦の競ひの會に、わたしも出て歌った。そしてみんなは大へんわたしをほめた。いちばん偉い詩人のアルタは座を下りて來て、わたしを禮してじぶんの高い座にのぼせ（三字不明）の草蔓をわたしに被せて、わたしを賞める四句の偈をうたひ、じぶんは遠く東の方の雪ある山の麓に去った。わたしは車にのせられて、わたしのうたった歌のうつくしさに酒のやうに醉ひ、みんなのほめることばや、わたしを埋める花の雨にわれを忘れて胸を鳴らしてゐたが、夜更けてわたしは長者のルダスの家を辭して、きらきらした草の露を踏みながら、わたしの貧しい母親のもとに戻ってゐたら、俄かに月天子の座に瑪瑙の雲がかかりくらくなったので、わたくしがそれをふり仰いでゐたら、誰かがミルダの森で斯うひそひそ語ってゐるのを聞いた。

（わかもののスールダッタは、洞に封ぜられてゐるチャーナタ老

龍の歌をぬすみ聞いて、それを今日歌の競べにうたひ、古い詩人のアルタを東の國に去らせた。）

わたしはどういふわけか足がふるへて思ふやうに歩けなかった。そして昨夜一ばんそこらの草はらに座って悶えた。考へて見るとわたしは、ここにおまへの居るのを知らないで、この洞穴のま上の岬に毎日座り考へ歌ひつかれては眠った。そしてあのうたは、ある雲くらい風の日のひるまのまどろみのなかで聞いたやうな氣がする。そこで老いたる龍のチャーナタよ。わたくしはあしたから灰をかぶって街の廣場に座り、おまへとみんなにわびようと思ふ。あのうつくしい歌を歌った尊ぶべきわが師の龍よ。おまへはわたしを許すだらうか。）

（東へ去った詩人のアルタは、どういふ偈でおまへをほめたらう。）

（わたしはあまりのことに心が亂れて、あの氣高い韻を覺えなかった。けれども多分は、

風がうたひ
雲が應じ
波が鳴らすそのうたを
ただちにうたふスールダッタ

星がさうならうと思ひ
陸地がさういふ形をとらうと覺悟する
あしたの世界に叶ふべき
まことと美との模型をつくり
やがては世界をこれにかなはしむる豫言者、
設計者スールダッタ

とかういふことであったと思ふ。）

（尊敬すべき詩人アルタに幸あれ、
スールダッタよ、あのうたこそはわたしのうたでひとしくおまへのうたである。いったいわたしはこの洞に居てうたったのであるか考へたのであるか。おまへはこの洞の上にゐてそれを聞いたのであるか考へたのであるか。おおスールダッタ。
そのときわたしは雲であり風であった。そしておまへも雲であり風であった。
詩人アルタがもしそのときに冥想すれば恐らく同じいうたをうたったであらう。けれどもスールダッタよ。
アルタの語とおまへの語はひとしくなく、おまへの語とわたしの語はひとしくない、韻も恐らくさうである。この故にこそあの歌

こそはおまへのうたでまたわれわれの雲と風とを御する分のその精神のうたである。）

（おお龍よ。そんならわたしは許されたのか。）

（誰が許して誰が許されるのであらう。われらがひとしく風でまた雲で水であるといふのに。スールダッタよ。もしわたくしが外に出ることができ、おまへが恐れぬならばわたしはおまへを抱きまた撫したいのであるが、いまはそれができないので、わたしはわたしの小さな贈物をだけしよう。ここに手をのばせ。）龍は一つの小さな赤い珠を吐いた。そのなかで幾億の火を燃した。

（その珠は埋もれた諸經をたづねに海にはいるとき捧げるのである。）

スールダッタはひざまづいてそれを受けて龍に云った。

（おお龍よ、それをどんなにわたしは久しくねがってゐたか、わたしは何と謝していいかを知らぬ。力ある龍よ。なに故窟を出でぬのであるか。）

（スールダッタよ。わたしは千年の昔はじめて風と雲とを得たとき己の力を試みるために人々の不幸を來したために龍王の（數字分空白）から十萬年この窟に封ぜられて陸と水との境を見張ら

せられたのだ。わたしは日々ここに居て罪を悔い王に謝する。）

（おお龍よ。わたしはわたしの母に侍し、母が首尾よく天に生れたならば、すぐ海に入って大經を探らうと思ふ。おまへはその日までこの窟に待つであらうか。）

（おお、人の千年は龍にはわづかに十日に過ぎぬ。）

（さらばその日まで龍よ珠を藏せ。わたしは來れる日ごとにここに來てそらを見、水を見、雲をながめ、新らしい世界の造營の方針をおまへと語り合はうと思ふ。）

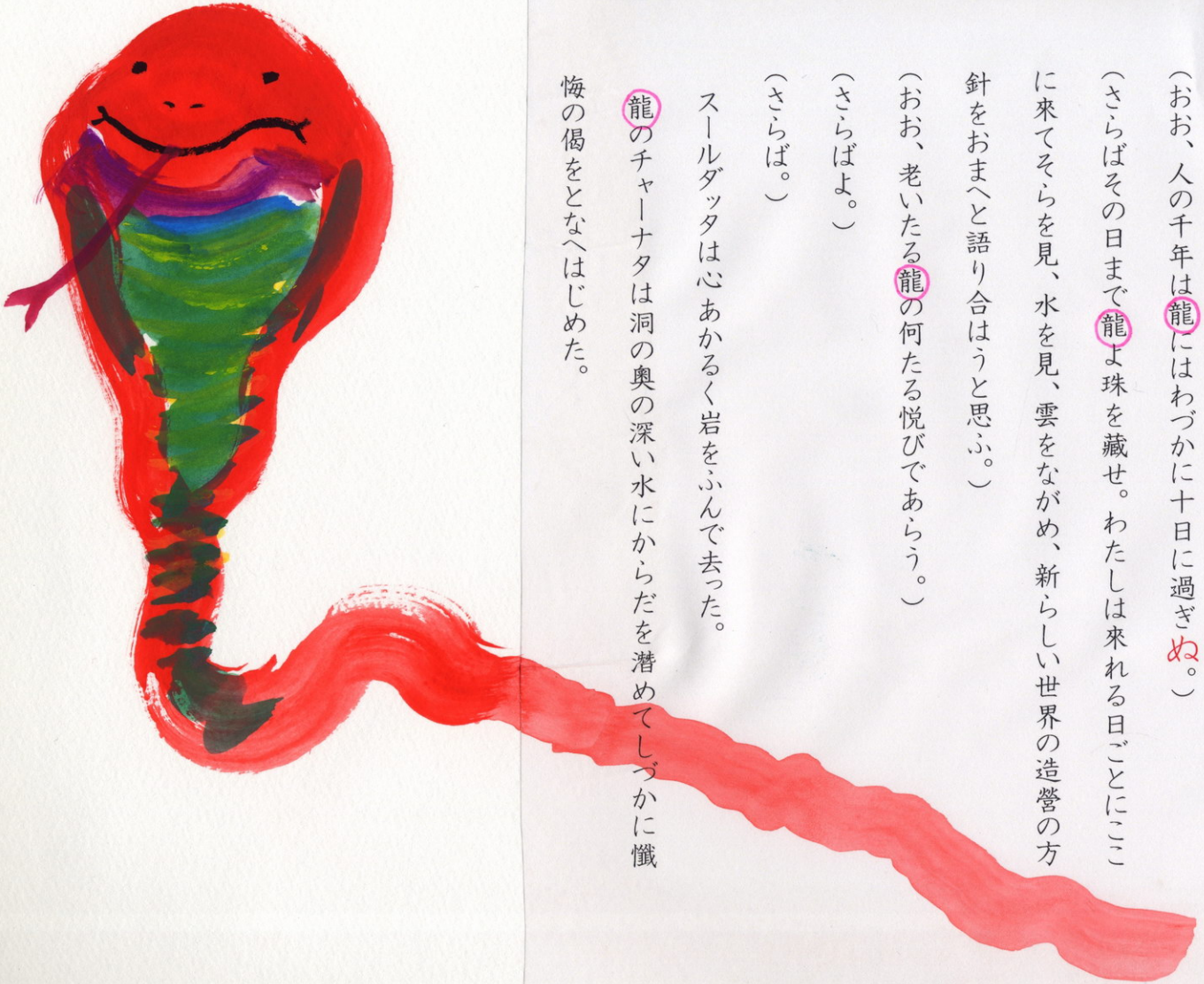
（おお、老いたる龍の何たる悦びであらう。）

（さらばよ。）

（さらば。）

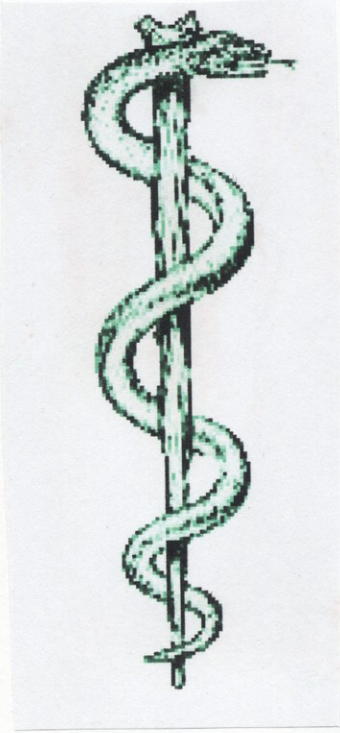
スールダッタは心あかるく岩をふんで去った。

龍のチャーナタは洞の奥の深い水にからだを潜めてしづかに懺悔の偈をとなへはじめた。



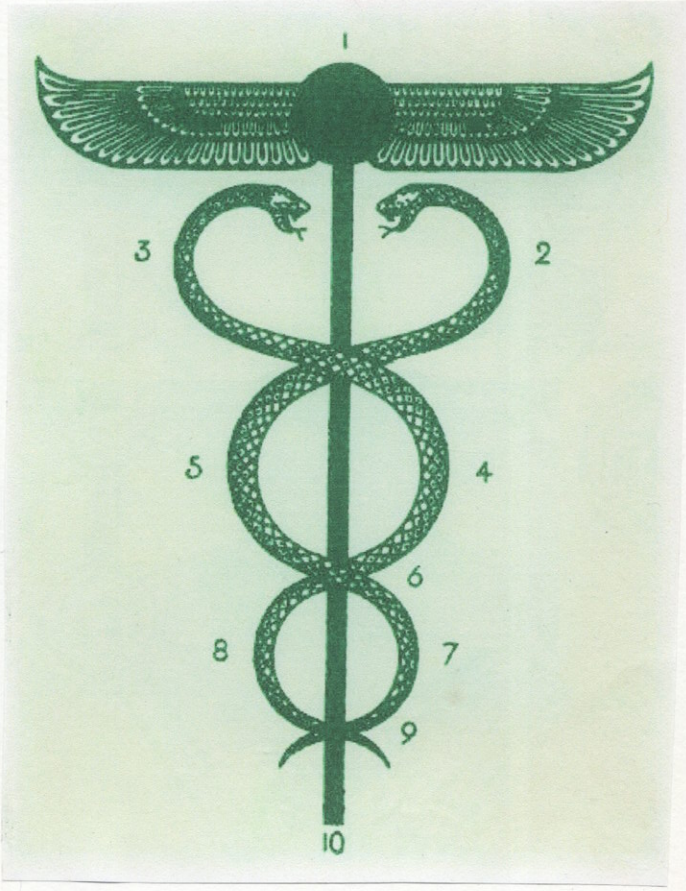
"ぬ"に見えませんか??

WHO



エントロピー減少
⇧
右ねじ

qabbalah



WMA